

ポスト社会主義グルジアの宗教実践の実態

——地域コミュニティにおいて宗教が果たす役割——

平成 26 年入学
グルジア
山田 奈緒美

キーワード：コーカサス，ポスト社会主義，宗教復興，宗教マイノリティー，民族と宗教

対象とする問題の概要

ソビエト連邦の解体後、独立した各共和国においては、宗教の復興現象が顕著に見られた。国民のマジョリティーが信仰する宗教は、多くの場合、新たな独立国家の形成過程におけるナショナリズムの高揚を支えるものとなり、新たな国家の枠組みにどのように適応していくかが宗教マイノリティーにとって重要な課題となった。しかし、ソ連解体を期に、無宗教的なイデオロギーから解放されて宗教が復興し、それが各共和国内において新たな課題を生み出したという説明は十分ではない。最近の研究においては、ソ連解体後も各共和国は社会主義時代の名残をとどめており、社会主義とポスト社会主義は分かちがたく結びついていることが指摘されている。また、社会主義を、近代化の一つのあり方として資本主義と対置させる見方も出てきている。つまり、ソビエト時代との連続性を持つポスト社会主義時代においては、そもそも本当に宗教が復興しているのか、宗教の復興とは何を意味するのかを、慎重に考察しなければならないのである。
(←キリスト教改宗の進むグルジア西部アジャリア自治共和国の中心都市バトゥミの街並み)



研究目的

ポスト社会主義の現代にあって、旧ソ連邦構成諸国の一つ、グルジアではどのような宗教実践が行われているのかを調査することが目的である。今回の調査においては、東部のパンキシ渓谷に住むキスティ人ムスリムと及び中部のテルジョラ地区のグルジア人正教徒を対象に、礼拝の観察を試みた。その際、人数や場所、建物の規模等の分析のみならず、参加者にとってそれらの実践がどのような意味を持つのかということを常に意識した。それは、ソビエト時代と現代の宗教の社会的位置づけはどれほど変化したのか、そしてどのように変化したのかということを考察する上で重要となる視点の一つである。また、信者でない外国人の調査者を、周囲の参加者がどのように迎えたかを観察することは、彼らにとって宗教実践がどのような位置づけにあるのかということを知るための手がかりの一つとなった。

フィールドワークから得られた知見について

2015年3月3日～24日までの約3週間あまり、グルジアにおいて現地調査を行った。今回は首都トビリシでの文献収集のみならず、国内を周遊し、各地の人々の生活実態を垣間見ることができた。

東部カヘティ地方パンキシ渓谷に住む、チェチェン系グルジア人のキスティ人は、ほぼ全員がムスリムである。第二次チェチェン紛争後、「ワッハービズム」が主に若年層を中心に広まる一方で、年配の人々を中心に「伝統的なイスラーム」の実践が受け継がれている。それぞれの宗教実践は基本的に「新しいモスク」と「古いモスク」に分かれて行われ、また男女別で時間をずらして礼拝が守られる。今回参加できたのは、女性たちの「古いモスク」における「伝統的なイスラーム」の礼拝であった。「古いモスク」は村で一番大きな通りから路地に入って何度か角を曲がったところにあった。金曜日の正午過ぎ、ガイドを務めてくれた友人のキスティ人女子大生と共に入り口の木製の引き戸を開けると、もう礼拝は始まっており、



(↑パンキシ渓谷の「古いモスク」における礼拝後の近況報告会) 年配の女性たちが十人余り、10帖あまりの広さの部屋の中で輪になってぐるぐると回っていた。彼女たちのジクルは、グルジア歌謡のポリフォニーの伝統を感じさせつつも、節を区切るビートの力強さが独特の躍動感を生み出していた。礼拝が進むにつれて旋律はゆるやかに変化していき、歩き回る速度にも緩急が出てきた。友人と私はこのジクルを輪の外で見守っていたが、彼女たちは特に警戒感を見せることもなく、写真を撮るようにと促してくれた女性もいた。礼拝の最後のお祈りでは、彼女たちのみならず、友人も一緒に祈っていた。友人は、「ワッハービズム」の信仰を有しているはずだが、実践においては「ワッハービズム」も「伝統的なイスラーム」も一つとしてとらえているようだった。礼拝のあとには、折りたたまれていた何枚かのカーペットが再び床に敷かれ、座って近況報告会のようなものが始まった。女性たちの何人かは友人の従姉を話題に出し、「最近会っていないが元気か」と友人に尋ねていた。私は友人の従姉の家に滞在しており、彼女が「ワッハービズム」に属することを知っていたので、気まずい雰囲気になるかもしれないと身構えていたが、彼女たちの会話は終始朗らかであった。この礼拝は、外に出て集まる機会の少ない女性にとって格好のコミュニケーションの場となっており、その和気藹々とした雰囲気は外部の者をも受け入れる寛容さを感じさせた。また、ソ連解体後に生まれた「ワッハービズム」と「伝統的なイスラーム」の境界線は、実はそれほど深く刻まれているわけではなく、それぞれが互いに見守りあいながら共存しているという可能性を示すものでもあった。



中部イメレティ地方テルジョラ地区では、グルジアの他の多くの地区と同様、グルジア正教徒の人口が圧倒的多数を占める。友人のグルジア人女子中学生の父親がグルジア正教会の司祭であり、家族そろって私を地区の教会に誘ってくれた。日曜日の10時ごろ、友人及び彼女の姉と共に、小高い丘の上に立つ小ぶりの教会に入った。礼拝は既に始まっており、堂内では40人ほどが佇み、祈りを捧げていた。私たちも、堂内の前方に位置する三つのイコンに口付けをし、額を当てたあと、彼らに加わ

(←テルジョラの友人の父親が再建した教会)

った。礼拝では、司祭の声と聖歌隊の歌が呼応するように響きあい、堂内を音に満たしながらも厳かな静謐さを感じさせた。司祭が至聖所から出てきて、聖所の周りを歩くときには、信者が彼の動きを追って体の向きを変えていく。堂内が一つの秩序を持った集まりであることを実感する瞬間であった。毎週日曜日の9時から3時間ほど行われる礼拝は、基本的に時間内の入退場は自由である。礼拝が終わったあとは、信者たちはそれぞれ知人たちと会話をしながらのんびりと帰途についていった。彼らにとって礼拝への出席は、宗教的な義務というよりもむしろ、日常的な習慣として捉えられているようであった。

しかし、この礼拝に私が参加することが出来たのは、友人の存在と私が日本で教会に通っているということが大きかったようである。友人の家族の知り合いの中には、私を礼拝に連れて行くことに関して納得のいかないような表情を見せた人が何人かおり、礼拝堂内においても私を見て戸惑いを隠せない様子の人は少なかつた。家族は、友人として、そしてキリスト教の教会に通う者として、礼拝への参加を促してくれたようだが、彼らの宗教実践に参加するのにあたり、何が歓迎されない要素となるかは、更なる分析が必要である。

(**グルジア南部の都市アハルツィへのサバラ修道院→**)



今後の展開・反省点

宗教実践は、特定の日時に行われる礼拝だけでなく、各家庭あるいは個人が日頃行っている活動をも視野に入れて総合的に分析すべきである。今後は、より長い期間をかけて現地に滞在し、人々の宗教実践

の全体像を浮き彫りにしていきたい。また、調査者である私自身が、異なる宗教的背景と民族アイデンティティーを持つ者であるという事実を再度確認し、私の宗教実践への参加に人々がどのような反応を示すのかということに関して、更に整理する必要があると思われる。さらに、今回調査することが出来た双方の礼拝は農村部のものであり、都市部のものと比較してどのような特徴があるのかを考察することが出来なかつたため、今後の課題としたい。

(**←アジャリア自治共和国コフレティ地方のクヴィリケモスク**)

